

YCU 夏季短期語学研修 派遣学生報告書

氏 名	Y.T	学部・学科	国際教養学部国際教養学科
学 年	4	派遣国	オーストラリア
派遣大学	サザンクロス大学		
コース名	General English		
期 間	2026 年 8 月 15 日～2026 年 9 月 12 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

授業は 8:30-10:00、10:15-11:45、12:15-13:15 の計 4 時間でした。午前と午後でクラスは変わり、午前中は比較級や a, an, the の活用などの文法を中心に学び、午後はエレクトティブの授業だったので、歌やアイエルのリスニング、プレゼンテーションなどを行いました。午前、午後のどちらもペアワークや意見交換の時間が多く、学んだ内容をすぐに実践に移せる点が良いと思います。授業外の課題はあまり課されませんでしたが、毎週金曜日にリスニングと文法の weekly test がありました。また、毎週金曜日の午後のクラスは授業がなく、バレーボール、クラフト、e ゲーム、カードゲームの 4 つから自由に選ぶことができました。午前と午後のどちらもクラス替えはなかったので、同じクラスになることのなかった人たちとも知り合う機会になってよかったと思います。

印象に残っている授業は、ペアで大学内を歩きインタビューを行ったことと、オーストラリア訛りについて学んだことです。インタビューについては、サザンクロス大学の学生や先生、大学で働いている人などが対象で、記憶力についての質問を行いました。大学の先生やホストファミリーは分かりやすい表現で話してくれたり、スピードもゆっくりでしたが、インタビューをした方はネイティブのスピードだったので聞き取るのに苦労しました。しかし、サザンクロス大学はオーストラリア出身の学生だけでなく、留学に来ている方が多くいたため様々な方とコミュニケーションを取れる貴重な機会になったと感じています。また、あまり英語がうまく話せなかったり、何度か聞き返してしまっても誰一人嫌な顔をせずインタビューに答えてくれたことが印象的でした。

オーストラリア訛りに関しては、マクドナルドはマッカーズ、アボカドはアボ、バーベキューはバービーと略して表現することについて学びました。訛りを通じてオーストラリアの文化についても少し学ぶことができたし、ネイティブの方と話すなかで略語が理解できたときは嬉しかったです。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

英語で文法を学ぶことで、日本で習ったときとは少し違う捉え方ができました。オーストラリアの自然や動物を扱うテーマが多く、授業内容に関連した単語や熟語を身につけることができたので、より理解につながりました。

また、留学期間中の授業は、高校のときの英語の授業などとは違い、相手と英語を通じてコミュニケーションをとる機会が多くありました。英語を使ってコミュニケーションをとることの楽しさに気づけただけでなく、自分自身の発音やイントネーションの課題も気づくことができました。先生やホストファミリーとの会話を通じて、少しでも発音やアクセントが違っただけで伝わらないことが多くあったからです。留学前は、そもそも単語や文法が分からなければ会話もできないし、リスニング力を鍛えなければ聞き取れないと思い、単語やリスニングをメインに勉強をしていました。しかし、実際に現地へ行き多くの人とコミュニケーションを取る中で、自分の発音が障壁になることが何度かあり、特に、th は舌を使って発音しないと全然伝わりませんでした。コミュニケーションを取るうえで、文法ももちろん重要ですが、実際に会話するときはそんなに考える時間もないしもっとスピーキング力を鍛えておくべきだったなと思っています。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

英語を話すことに対するハードルがすごく下がったと感じています。留学に行く前は、話すときはちゃんとした文法でなくてはいけないと思っていました。しかし、なんといえよいかとっさに思いつかず単語だけになってしまっても意外と通じることが分かり、英語に対する抵抗感が薄れたと感じています。留学にきて最初のほうはホストファミリーから話しかけてもらうことのほうが多かったですが、帰国前には自分から話しかける機会も増えました。また、その場で考えながら話すときはおろそかになってしまうことが多かった複数形や過去形は、もっと気を遣って話すべきだと気づくことができました。また、円滑なコミュニケーションのためにももっと英語を勉強しようというモチベーションにもつながりました。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

自分はもう半年後には卒業し就職するので英語を使う機会は多くないと思いますが、今後も英語の勉強をつづけていきたいです。そのためにも、留学期間の間に感じた、自分の気持ちを英語で表現してそれが伝わったときの嬉しかった気持ちを忘れずにいたいと思います。ただ単語を覚えたりリスニングをするだけのインプットではあまり英語力向上につながらないかわかったので、発音やイントネーションなど実際に声に出すアウトプットをより重視したいと考えています。留学を通じてワーキングホリデーに興味をもったので、もっと早く留学に挑戦していればよかったとも思いますが、社会人になる前に留学を経験できてよかったと心から思っています。

YCU 夏季短期語学研修 派遣学生報告書

氏 名	M.S	学部・学科	国際教養学部国際教養学科
学 年	3	派遣国	オーストラリア
派遣大学	サザンクロス大学		
コース名	General English		
期 間	2026 年 8 月 15 日～2026 年 9 月 12 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

留学先での授業は、文法や語彙などを教師から一方的に学ぶ講義形式が中心ではなく、生徒同士で英語を使いながら取り組むアクティビティやレクリエーションを中心としたものであった。ペアやグループで会話をしたり、与えられたテーマについて意見を交換したりする機会が多く、実際に英語を使ってコミュニケーションを取ることを重視した授業内容であった。

授業では、週に一度、文法や語彙などの理解度を確認する進捗テストが実施された。テストで問われる文法事項は、主に中学校で学習するような基礎的な内容であり、現在形・過去形や助動詞、疑問文など、英語でコミュニケーションをする上で基本となる事項が中心であった。そのため、文法知識を改めて確認するとともに、英語を正確に使うための基礎を復習する機会となった。

また、週に一度、通常の英語学習とは異なるアクティビティの時間が設けられており、スポーツや制作活動など、複数の選択肢の中から活動を選ぶことが

できた。普段の教室とは異なる環境で他の生徒と交流することができ、活動を楽しむことができた。しかし、先生の監督がなく日本人生徒だけでやることも多いので、律儀に英語で話をしている人はほとんどいなかった。

さらに、週に一度、大学のボランティアの学生と会話をする機会も設けられていた。授業で学んだ表現を実際の会話の中で使用することができ、自分の英語がどの程度相手に伝わるのかを確認する貴重な機会となった。一方で、会話相手は必ずしもオーストラリア人ではなく、さまざまな国籍の学生であった。そのため、異なる英語の発音や話し方に触れることができ、国籍の異なる人同士でも英語を共通語としてコミュニケーションを取る経験につながった。

このように、今回の授業では、基礎的な文法を確認しながら、アクティビティや会話を通して実際に英語を使うことを重視していた点が特徴的であった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

今回の授業を通して、英語の基礎的な文法知識だけでなく、実際のコミュニケーションにおいて英語を使うための力を身につけることができた。週に一度の進捗テストでは、中学校で学習したような基本的な文法事項を改めて確認することで、自分が理解できている部分と、曖昧になっている部分を把握することができた。また、ペアやグループでの活動を通して、文法的に正しい英語を話すことだけでなく、限られた語彙や表現を用いて相手に自分の考えを伝えることの重要性を学んだ。

特に、さまざまな国籍の学生と英語で会話する経験から、英語にはさまざまな発音や話し方があることを実感した。相手の英語が聞き取りにくい場合でも、文脈から意味を推測したり、聞き返したりすることで会話を続ける力が身についた。また、自分の英語が完璧でなくても、伝えようとする姿勢があればコミュニケーションを成立させられるという自信にもつながった。

一方で、日本人生徒同士では日本語で話すことも多く、英語を使う環境を自ら作ることの難しさも感じた。そのため、授業で与えられた機会だけに頼るのではなく、日常生活の中でも積極的に英語を使うことが重要だと学んだ。今回の留学を通して、英語力だけでなく、異なる文化や背景を持つ人と積極的に関わる姿勢も身につけることができた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

留学前は、英語で会話をするに対して、文法を間違えたり、相手に自分の言いたいことが伝わらなかったりすることへの不安があった。そのため、英語を話す際には正しい文章を作ってから話そうとする意識が強く、積極的に発言することに抵抗を感じることもあった。

しかし、実際に授業を受け、さまざまな国籍の学生と英語で会話する中で、英語でのコミュニケーションに対する考え方が変化した。授業では、必ずしも完璧な文法や豊富な語彙がなくても、知っている単語を組み合わせたり、言い換えたりすることで、自分の意思を相手に伝えることができた。また、相手の英語が聞き取りにくい場合にも、聞き返したり、文脈から意味を推測したりすることで会話を続けることができた。この経験から、「正しい英語を話さなければならない」という意識よりも、「まずは自分から伝えてみる」という姿勢が大切だと感じるようになった。

授業後は、英語を話すことへの緊張や抵抗感が以前よりも小さくなり、間違いを恐れずに発言してみようと思えるようになった。今後も、完璧さを求めすぎず、実際に英語を使う機会を積極的に増やしていきたい。

(4) 今後はどう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今回の留学で得た経験を、今後の大学での学業や英語学習に生かしていきたい。特に、英語を「知識として学ぶ」だけでなく、実際に使うことの重要性を実感したため、今後は授業で学んだ文法や語彙を、会話や文章作成の中で積極的に使用することを意識したい。また、今回の留学では、自分の英語力不足から言いたいことを十分に伝えられない場面もあったため、帰国後は語彙や文法などの基礎を改めて復習するとともに、英語のリスニングやスピーキングの学習にも継続的に取り組みたい。さらに、大学で専門的な分野を学ぶ上でも、海外の文献や研究資料を読むために英語力は重要である。今回の経験を一時的なものにせず、今後の専門分野の学習や将来の進路にもつなげていきたい。

YCU 夏季短期語学研修 派遣学生報告書

氏 名	T.T	学部・学科	理学部理学科
学 年	3 年	派遣国	Australia
派遣大学	Southern Cross University		
コース名	サザンクロス大学		
期 間	2026 年 8 月 15 日～ 2026 年 9 月 12 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

午前と午後でクラス内容が異なり、それぞれに特徴があった。
 午前のクラスは主に文法やそれにまつわるボキャブラリーをその週のテーマに従って学ぶ。ディスカッション等も多く、学んだ表現をその場で生かすことができる機会が多かった。ライティングの課題なども出され、自分がどこを直せばよいのかが明確化できた。
 また、英単語の意味を伝えてパートナーがその単語を当てるなどのワークもあり、興味深い授業だった。

更に、最後にはオーストラリアに来てどのように感じたか、思い出や買ってよかったものを伝えるプレゼンテーションをグループで行った。

印象的な授業として、教室の外に出て、サザンクロス大学で英語以外を専攻している人に話しかけたり、難しい仕事をしている人に話しかけるようなものが挙げられる。現地の人に話しかけ、いろいろな人に会うというのは新鮮な体験であり、ホームステイ先や先生以外の人と話し、自分の会話力を試すことができる貴重な体験であった。

また、毎週金曜日には授業理解度を確認する軽いテストがあった。授業を受けていれば解ける内容であったため特に対策を行うことはなかった。

午後は主にスピーキングを使用する授業だった。あるテーマについて small talk を行ったり、すごろくのマスが話すテーマになっており、それについて 1 分間話したりと話すことに重点が置かれていた。さらに、kahoot などのクイズサイトを使用しオーストラリアについて知ることもできる。また、毎週金曜日には 4 つのアクティビティから一つ選び、それを行うクラスが行われた。クラフト、バレーボール、ボードゲーム、ビリヤードの中から体験するものを選ぶ。どれも現地の先生が監督を務めるため楽しんで英語を使用することが出来る点が魅力的であった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

授業を通じてオーストラリアがどのような国であるか、どのような動物が生存しているかを知ることが出来た。オーストラリアは植民地文化を持つ国であり、UK がオーストラリアに来て開発を進めたことや、アボリジニという先住民族が存在することなどを学習した。さらに、オーストラリアの沿岸部でないところはほぼ砂漠であり、そこを outback と呼ぶことを理解した。また、オーストラリアには多様な生物が生息しており、コアラやカンガルーはもちろん、タスマニアデビルやクオッカ、ビーチキンなどのオーストラリア特有の生物が存在し、人と共生していることが理解できた。

加えて、授業では、英文法を扱い自分が理解できていないことを再度認識することが可能であった。いままで感覚で使ってきた uncountable と countable の違いや the a, an などの使用の違いなどをより理解することが出来た。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前はどのような授業形態であるのかを知らなかったため、不安でいっぱいであったが、授業をしている先生方が優しく、分かりやすく授業を行ってくれたため、その気持ちはなくなった。また、授業中に分からなくなったりした場合その場で先生に質問をするということが重要であると実感し、実際に授業中に質問をしてみると先生が喜んで解説をしてくださり、自発性が大事であることを学んだ。日本では、知らないことは恥ずかしいこと、その場の流れを切ることはあまりよく思われなと感じるが自分の理解のためにも自発的に質問をするということが重要であるという意識改革があった。さらに、英語で会話をするペアワークが多く、言い換えの言葉や伝わらなかった時の試行錯誤する点が必要であると実感した。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

この体験を通じて、英語を学習するうえでスピーキングがいかに大事かを学んだ。いままでインプットの授業形態が多く、インプットしたもの勝ちだと感じていたが、自分から自発的にアウトプットすることにより、単語や文法への理解が増すことが分かった。せっかく英語を使用する機会に恵まれたので、今後も洋画を見たり、アプリなどを利用したりしてインプットとアウトプットを継続し、学習を続けていきたいと感じた。また、理学部であるため、アカデミックな英語を再度学習し、今後役に立てて生きたい。

YCU 夏季短期語学研修 派遣学生報告書

氏 名	H.W	学部・学科	国際教養学部国際教養学科
学 年	2 年	派遣国	オーストラリア
派遣大学	サザンクロス大学		
コース名	夏季短期語学研修		
期 間	2026 年 8 月 15 日～2026 年 9 月 12 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

授業は午前のより学術的な授業（コアクラス）が二コマ、午後の会話や遊びを交えた授業（エレクトィブクラス）が一コマという構成だった。午前のクラスはそれぞれの理解度によってクラス分けされていた。

コアクラスでは、基本的な英語の文法を学び、グループ内でディスカッションや会話をベースに授業を受けていた。中学や高校で受けていた授業内容とさほど変わりはないが、ネイティブの方から教えてもらえると驚くほどわかりやすかった。また、IELTS のテストや週一回の基礎確認テスト、スピーキングテスト、ライティングテストなど、自分の学習度が分かるさまざまなテストが実施されていた。週ごとに学習するテーマが決められ、オーストラリアの自然や動物についても学ぶことができた。最後の週には、「My experience in Australia」というテーマを設け、みんなの前でプレゼンする授業もあった。最後のプレゼン以外にもクラスで発表する授業があり、良い経験になった。

エレクトィブクラスでは、先生やほかの生徒とのコミュニケーションをベースに授業が行われた。会話の議題は、オーストラリアの都市や観光地、日本の文化との違いなど、親しみやすい内容のものが多かった。授業ではあるが、先生も生徒もリラックスし、楽しみながらスピーキング力を向上させられる機会であった。

毎週金曜日は、午後の普段のエレクトィブクラスに代わり、アクティビティクラスというものがあつた。これは、それぞれ自身の英語力やクラス分け関係なく、クラフトやスポーツ、カードゲームなどを自由に選択し、遊びながら英語を使うクラスだった。普段クラスが違ふ生徒と話すことができるほか、外でバレーボールをしていると現地の学部生や教師も飛び入り参加してくるなど、より自然に英語を使うことができた。留学生だけでなく、現地の人々と交流できたことが印象的だった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

基礎的な文法や語彙力、リスニング力など、すべてにおける力が向上したように感じる。日本の中学校や高校で英語教育を受けても、一方的に知識を与えられただけにすぎないように感じていたが、実際に英語圏の国に行き、ネイティブスピーカーと会話ができることで、本当に身についたと思った。話す速度も、語彙も留学生に合わせるのではなく、留学生を引っ張ってくれるような授業ばかりで、授業を受けていて楽しかった。また日本人以外の留学生もいたため、自分から英語を話そうという気持ちを持つことができた。

また英語だけでなく、オーストラリアをはじめとする世界についての知識も増えた。授業でオーストラリアと他国の比較が多く取り上げられ、オーストラリアの知識はもちろん、日本についての理解も深まった。日本に住んでいるときは、注目さえしなかった点が、他の国で暮らしたり、他の国の人に質問されたりすることによって、自分が知らなかった日本の側面について触れることができた。

サザンクロス大学での授業を通して、英語のスピーキング、リスニング、語彙力が培われたほか、さまざまな国についての知識も増やすことができた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前は自分の英語力に自信がなく、英語で人と会話することは好きだったが、自分よりも英語がうまい人ばかりで、周りにどう思われるのだろうと不安が大きかった。しかし授業を通して、たくさんの生徒や先生とディスカッションをすることで、積極的に話してたくさん間違おう、間違いを恐れるよりも自分が今使える英語力でもっとたくさん話したい！と思うようになった。間違えたほうが正しい表現の仕方をより効果的に覚えられるように感じたうえ、自分が思っていることは自分の言葉で伝えないといけないと思った。日本人は察する文化があると思うが、他の外国の人々に自分が考えていることを察してもらうことはかなり難しい。だからこそ、コミュニケーションをとるには自分から話さないといけない環境で過ごすことができてよかった。以前までは日本の大学での授業での発言も恥ずかしいと感じていたが、今後はオーストラリアでの経験を活かして、自分から発言することを心がけていきたい。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今後も英語の勉強を継続していくことは当たり前とし、就活やインターンなども海外や国際系を視野にいれ、それに向けて準備を進めていきたい。まずネイティブと話せる環境を大切にしたいため、現地でできた友達と継続的に会話をしたり、今までは気に留めていなかった留学生チューターをしたりなど、自主的に望んでいきたい。また、TOEIC や TOFLE などさまざまな英語のテストを受け、自分の英語力を確認、向上する機会を定期的に設けていきたい。さらに、留学中に始めた英語での日記や映画、アニメのシャドーイングなど、身近な勉強も続けていきたい。英語での授業も積極的に履修していきたい。

YCU 夏季短期語学研修 派遣学生報告書

氏 名	Y.O	学部・学科	国際商学部
学 年	1 年	派遣国	オーストラリア
派遣大学	サザンクロス大学		
コース名	夏季短期語学研修		
期 間	2026 年 8 月 17 日～2026 年 9 月 11 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

授業は午前と午後でクラスが分かれていた。まず、午前の授業は月曜日から金曜日までである。クラスの構成は 15 人ほどで中国人が 2 人とその他は日本人だった。授業の内容はリーディング、ライティング、スピーキング、リスニングを幅広く学習するといった内容だ。午前の授業の中で印象に残ったのはディスカッションとお題を当てるゲームだ。ディスカッションはその日の授業で学習したスマートシティに賛成か反対かに関するものだった。スマートシティとは AI を積極的に活用したより合理的な街づくりで、賛成派はより効率的で住みやすい街になるという意見を出し、反対派は費用がかかるという意見を出し議論した。お題を当てるゲームは出されたお題を NG ワードを使わずに説明して、回答者に早くお題を当てさせたチームが勝ちというゲームだ。このゲームは英語で説明することの難しさを実感した。金曜日には週のまとめテストがあった。次に、午後の授業も人数は 15 人ほどであったが、メンバーは午前とは違うメンバーで月曜日から木曜日までである。午後の授業は主にスピーキングに特化した授業だった。午後の授業で特に印象に残ったのはスラングの授業だ。オーストラリアのスラングはイギリスやアメリカと違ったスラングがあることを学び、ホームステイ先の家族に実践してみた。放課後のアクティビティも充実していた。水曜日の放課後はカンパセーションアクティビティがあり、現地のカンパセーションクラブに所属する学生やボランティアで来た人たちとボードゲームをしたり、週末に行ったほうがいい場所を教えてくれるなど英語で話す機会があった。金曜日の午後にはボードゲーム、ビリヤード、手芸教室、バレーボールの 4 つのアクティビティを選んで参加した。自分はボードゲームに参加して、そこでも話す機会がたくさんあった。その他の日の放課後は E スポーツをした。サザンクロス大学は E スポーツに力を入れている大学で、いろいろなゲームを現地の学生と一緒にやるなど楽しんだ。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

授業を通して、オーストラリアの文化や英語について様々な知識を得ることができた。特に印象に残ったのはスラングである。例えば、マクドナルドはマッカズとよんだり、いつも通りだよという意味がある same old という表現、友達に会ったときに hi と同じような感覚で使う Gdaymate という表現などを学んだ。日本で学んできた英語とは異なる表現が多く、実際の会話では教科書だけではわからない言葉が多く使われていることが分かった。ライティングとスピーキングがより書きやすく、話しやすくなるポイントも学んだ。自分の意見、理由や例の提示、そしてまた自分の意見という工程を行うことでより書きやすく、話しやすくなる。これまで英語を書く時や話すときは、単語や文法が間違っていないかを意識しすぎていたが、読み手や話し手に理解しやすい順番で話すことも重要だと分かった。オーストラリアの文化でいうと、イギリスの影響を受けていると感じた。例えば、center が centre になるなどイギリス英語を町で多く見かけた。英語での手紙の書き方やメールのやり取りの仕方、謝罪のやり方も学んだ。実際に、最終日にホストファミリーに手紙を書いたり、現地でできた友達に帰国した後も連絡を取ったりするなど実践している。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

自分は授業で習ったことを実際に使ってみることを特に心掛けた。スラングなどの初めて知った知識や知っていても会話の時になかなか出てこない表現をホームステイの家族や買い物にいたときに使うようにした。そうすることによって、授業を受ける前は英語を話すことに緊張したり、抵抗感があったりしていたのが、自分の英語がネイティブの人に伝わった田生還やうれしさを感じ、英語を話すことが楽しく、自分の英語力が少しずつ向上しているのを感じられた。その一方で、達成感だけでなく自分の課題も実感した。ネイティブの人の話すスピードについていくことが難しかったり、自分の発音が上手くなく聞き返されたりも経験した。自分は長期の留学や海外での仕事も考えているので、そのためにもこの短期の留学で実感した自分の課題の克服に励みたいという思いが留学前に比べて強く思うようになった。中学や高校の時は自分から積極的に手を挙げて発言することもなかったが、留学中は自分から発言したり、質問できるようになった。

(4) 今後はどう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

この留学を通して、自分の課題はリスニングと発音だと感じた。具体的に言えば、リスニングは英語話者のスピードにまだついていけないことと中国人や南アメリカ出身の人は独特な英語の発音をしており最初のほうは困惑した。発音は自分の言ったことが聞き返されることがや発音を誤解していた単語もあった。これらを改善するためにリスニングは映画から抜粋したリスニング練習をユーチューブやInstagramのリールで見かけるのでそれを活用し、発音は単語帳をする際に音声を聞きながら勉強するように心がける。それだけでなく、AI と英会話できるアプリがあるので、それをうまく活用しリスニング、発音、スピーキングを同時鍛えていきたいと思う。

YCU 夏季短期語学研修 派遣学生報告書

氏 名	M.T	学部・学科	国際商学部・国際商学科
学 年	一年	派遣国	オーストラリア
派遣大学	サザンクロス大学		
プログラム名	夏季短期語学研修		
期 間	2026 年 8 月 15 日～ 2026 年 9 月 12 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

留学期間中は、午前と午後で内容の異なる英語の授業を受講した。午前中の授業では、20 人ほどのクラスで文法を中心に学習した。教材を使用しながら、文法の確認だけでなく、リスニングやリーディングの練習にも取り組んだ。特に、先生から一方的に説明を受けるだけでなく、「Kahoot!」などのゲーム形式の活動も取り入れられており、楽しみながら英語を学ぶことができた。また、問題に答える際には、学んだ文法を実際に使って考える必要があったため、知識として覚えるだけでなく、実践的に身につけることができた。

授業の課題としては、グループプレゼンテーションが課された。4 人程度のグループに分かれ、留学中に経験したことをテーマとして、英語でプレゼンテーションを行った。発表内容をグループ内で相談したり、英語で文章を考えたりする中で、自分の考えを相手に分かりやすく伝えることの難しさを感じた。一方で、グループのメンバーと協力して発表を完成させることで、英語でコミュニケーションを取りながら一つの課題に取り組む経験ができた。

午後の授業では、スピーキング力の向上を目的として、クラスメートとの会話やペアワークを中心とした活動を行った。日常的な話題について英語で意見を述べたり、相手の話を聞いて質問したりする機会が多く、実際に英語を使う時間が十分に確保されていた。また、先生と直接会話する時間もあり、分からない表現を確認したり、自分から積極的に話しかけたりすることで、英語を話すことへの抵抗感を減らすことができた。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

授業を通して、英語の文法や語彙だけでなく、実際の会話で使える英語の知識を身につけることができた。午前中の授業では、教材を使って文法を学び、リスニングやリーディングの練習にも取り組んだ。文法については、これまで知っていた内容でも、実際の文章の中でどのように使われるのかを学ぶことで、より理解を深めることができた。また、リスニングでは、英語を聞き取るためには単語を一つずつ聞くのではなく、文章全体の内容を意識することも大切だと分かった。

午後の授業では、クラスメートや先生との会話を通して、日常的に使われる英語表現を学ぶことができた。実際に会話をする中で、教科書で学んだ表現をそのまま使うだけでなく、相手の話に合わせて言葉を選んだり、別の表現に言い換えたりすることが必要だと学んだ。また、分からない単語があっても、知っている単語を使って説明することで会話を続けられることも分かった。授業を通して、英語は文法や単語を覚えるだけではなく、それらを実際の場面で使うことが重要だということを学んだ。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

授業を受ける前は、英語で話すことに対して少し抵抗感があり、自分から英語で話しかけることに緊張していた。間違った文法や発音で話してしまったらどうしようと考えてしまい、英語で話すことをためらうこともあった。しかし、授業ではクラスメートと会話をする機会が多く、簡単な英語でも実際に使ってみることで、少しずつ自信を持って話せるようになった。分からない単語があっても、知っている言葉を使って伝えることができると分かり、間違いを恐れずに話すことが大切だと感じるようになった。また、先生やクラスメートと英語で会話をする中で、自分の言ったことが相手に伝わったときの嬉しさや、会話が続けていく楽しさを実感した。その結果、以前よりも英語で話しかけることへの抵抗感がなくなり、自分から積極的に英語を使ってコミュニケーションを取ることができるようになった。留学を通して、英語を「勉強するもの」だけではなく、「人とつながるためのもの」として楽しいと感じられるようになったことが、自分にとって大きな変化だった。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今回の留学で身につけた英語力や、英語でコミュニケーションを取る楽しさを、今後の学業にも活かしていきたい。特に、留学中にスピーキングやリスニングの力がまだ十分ではないと感じる場面があったため、帰国後は英会話を習い、実際に英語を話したり聞いたりする機会を増やしたい。また、会話をする中で、知っている単語が少ないことで言いたいことをうまく伝えられないこともあったため、今後は単語力の向上にも力を入れたい。授業や英会話で学んだ表現を積極的に使いながら、英語で自分の考えを伝える力をさらに伸ばしていきたい。そして、今回の留学で得た経験を一度きりで終わらせず、将来はさらに英語力を身につけた上でもう一度留学し、より幅広い人と英語でコミュニケーションを取ることを目指したい。

YCU 夏季短期語学研修 派遣学生報告書

氏 名	S.H	学部・学科	データサイエンス学部データサイエンス学科
学 年	1 年	派遣国	オーストラリア
派遣大学	サザンクロス大学		
コース名	夏季短期語学研修		
期 間	2026 年 8 月 15 日～ 2026 年 9 月 12 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

週 5 日、1 日 5 時間（授業 4 時間＋自習 1 時間）× 4 週間の集中プログラムで学習を進めた。日課は朝 8 時 30 分に始まり、午前中に 15 分の休憩を挟んで 1・2 時限目の講義、30 分の昼休憩後に 3 時限目の講義を受け、午後は各自で自習に取り組むスケジュールであった。1・2 時限目の授業では週ごとに明確なメインテーマが設定され、専用のプリント（ワークシート）を用いてリスニングやディスカッションを精力的に行なった。同時に、仮定法や可算・不可算名詞の識別など、中学・高校で習得した基礎英文法を改めて見直し、実践的な会話へ応用するトレーニングに注力した。課題としては、初週の休日に「オーストラリアで感じた文化ギャップや驚き」をテーマとした英作文（約 120 語）が課され、数週間後には講師からの丁寧な推敲・添削フィードバックを通じて記述力の向上を図った。さらにプログラムの総仕上げとして、最終週の金曜日には個人プレゼンテーションを実施した。日本から持参して重宝したもの、おすすめのお土産、日豪の文化の違いといった多様なテーマから各自 1 つを選択し、1 分 30 秒～2 分間という限られた時間内で工夫を凝らして発表を行なった。現地講師陣のタイムスケジュールに対する柔軟さも印象的であり、日本の厳密な時間管理とは対照的に、開始予定時刻から数分遅れて授業が始まり、終了時には過度な延長をせず 2～3 分ほど繰り上げて終わるなど、現地独特のおおらかな時間感覚を体感した。また、ゴールドコーストでの生活が長い講師からは、ハーバータウンなどの大型ショッピングセンターをはじめ、オーストラリア発祥の人気フローズンヨーグルト店「Yo-Chi」やアサイーボウル専門店、さらにはブリスベンでの花火大会やゴールドコーストショーといった地域イベントに至るまで、ローカルならではの魅力的な観光・文化情報を数多く紹介してもらい、現地理解を深める貴重な機会となった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

4 週間という限られた研修期間の中で、英語力そのものを劇的に飛躍させることは容易ではなかったが、実生活や多様な背景を持つクラスメイトとの交流を通じて、教科書等では得られない実践的な知見や言語に対する新たな視点を培うことができた。特に大きな気づきとなったのは、ネイティブスピーカーや多様な国籍の生徒が話す英語のリズムや発音のリアルな質感である。日本で受けてきた 6 年間の英語教育では、日本人学習者向けに丁寧の手減量された、はっきりと聞き取りやすい発音やスピードが主流であったことを痛感した。実際の現場では、語と語の脱落や連結（リンキング）が頻繁に起こり、より自然でスピード感のある英語に触れることで、生の音声に対するリスニングの意識が大きく刷新された。また、クラスには韓国をはじめとする異なる国・地域からの留学生も在籍しており、各国の母語の影響を受けた独特なアクセントや抑揚を持つ英語に触れる機会を得た。こうした多国籍な環境を経験したことで、日本語話者が無意識に行っている 1 音 1 音を過度に強調して発音する癖を客観的に自覚すると同時に、世界で話されている英語の多様性や、単なる文法知識を超えたコミュニケーションの本質について深い知見を得ることができた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

研修前は、これまで学校で積み重ねてきた英語知識をベースに、現地の生きた発音や表現に触れることで自分の英語力を飛躍的に発展させようと強い意気込みを抱いていた。しかし、実際に授業が始まると、一度聞き取りに躓くとその後の内容まで見失ってしまうというリスニング試験特有の現象に何度も直面し、自身の不甲斐なさに落ち込む場面も多かった。しかし、この挫折を通して「何のために英語を上達させたいのか」という目的意識と、それに適した学習法を見極める重要性に気づく大きな転機となった。例えば将来海外で働くことが目的なら現地生活による実践的なアウトプットは非常に効果的だが、英語の論文を読み解くことや他者に教えることが目的ならば、必ずしも留学だけが最適解ではないという客観的な視点を得た。渡航前の憧れから脱却し、自分の将来に即した英語学習の姿勢を確立することができたように感じる。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

本渡航を通じて、長期間英語でコミュニケーションを取り続ける生活スタイルは必ずしも自身に適していないと実感した。一方で、毎日英語に囲まれた環境で過ごしたことで、英語という言語に対する心理的なハードルが下がり、強い親近感を抱くことができた。この経験は、今後の大学での学業や専門知識の修得において大きな糧になると確信している。今後は、現地で培った英語への抵抗感のなさを強みとし、専門分野における英語論文の読解や最新の海外文献を活用した研究活動に積極的に活かしていきたい。スピーキングに固執せず、文献購読をはじめとする読む学習を中心に据え、学術的な英語力を高めることで自身の専門性を深めていきたい。